

現職候補はなぜ強いのか -  
金沢市における2022年参院選に関する意識調査データの分析 -

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-03-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岡田, 浩, OKADA, Hiroshi メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24517/00068969">https://doi.org/10.24517/00068969</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



# 現職候補はなぜ強いのか

## — 金沢市における2022年参院選に関する意識調査データの分析 —

岡 田 浩

### 1. はじめに

2022年7月10日に投票が行われた第26回参院選は、維新の会は改選6議席を12に倍増させたものの、それ以外の野党は立憲民主党が改選23議席を17に減らすなど振るわず、自民党が改選55議席を63に伸ばして大勝した。

本稿で分析する有権者意識調査データの対象の石川県選挙区（改選1人区）においても、自民党公認の岡田直樹候補が、立憲民主党公認の小山田経子候補ほか5人の野党候補に勝利した（〔表1〕参照）。岡田候補は、この参院選後の内閣改造で地方創生担当大臣に就任したが、それまでに参院議員を3期18年務めて財務副大臣や官房副長官などの要職を歴任してきた現職候補であり、5人の新人候補にトリプルスコア以上の差をつける圧勝であった。

現職候補の選挙の強さは国内外でよく指摘される場所であるが<sup>1</sup>、なぜ現職候補は強いのであろうか。候補者の側の要因としては、議会の委員会での活動等を通じた利益誘導などの選挙区へのサービスで支持を獲得できること

---

1 特に、選挙区ごとにただ1人の議員が代表者として有権者とのつながりを独占する小選挙区制において現職優位ということが指摘されるが（川人, 2004, 272）（Matland and Studlar, 2004, 104）、小選挙区制を採用しているアメリカやイギリスにおける現職候補の優位を指摘する研究は、ケインら（Cain, Ferejohn, and Fiorina, 1987, 169-174）や本文中で挙げたものなど数多く存在する。日本の衆院の小選挙区選挙における現職候補の優位を指摘する研究としては、増山（2013, 21-41）や鈴木（2013）や岡田（2022）などがある。一方、衆院の小選挙区の自民党候補について候補者自身が現職か否かのみならず同じ政党の候補者が後を継いだ場合も含めた「党派的現職優位効果」を不連続回帰デザインを用いて検証したところ、効果が確認できなかったとする研究もある（Ariga et al., 2016）。

[表1] 2022年参院選石川県選挙区開票結果<sup>3</sup>

氏名	党派	推薦・支援	石川県全体		金沢市	
			得票数	得票率	得票数	得票率
岡田直樹	自由民主党	公明党	274,253	64.5%	92,170	61.0%
小山田経子	立憲民主党	社民党・国民民主党	83,766	19.7%	31,154	20.6%
西村祐士	共産党		23,119	5.4%	9,897	6.5%
先沖仁志	参政党		21,567	5.1%	8,866	5.9%
山田信一	NHK党		12,120	2.9%	4,494	3.0%
針原崇志	維新政党・新風		10,188	2.4%	4,541	3.0%

(Cain, Ferejohn, and Fiorina, 1987, 117) (Desposato and Petrocik, 2003, 18)、議員に与えられる文書通信交通滞在費やスタッフ雇用補助など有権者への働きかけに使用できる資源が多いこと (Gary and Carson, 2020, 49)、有力な現職候補に対しては敬遠して有力な対抗馬が出にくいこと (Mondak, 1995)、(特にアメリカ下院の場合) 選挙区再編時に自らに有利になるよう影響力を発揮できること (Tuft, 1973, 551)、過去の経験からくる選挙活動の巧みさ (Cox and Katz, 1996)、などの点が指摘されてきた。

しかし、これらの有利な条件に恵まれた現職候補であっても時には敗北することもあるように、選挙のゆくえを最終的に決するのは有権者の投票行動である。有権者は、これらの条件を活かした現職候補の活動の影響を受けてどのように候補者を意識し、投票行動を行っているのであろうか。本稿は、2022年参院選後に筆者が金沢市で実施した有権者意識調査<sup>2</sup>のデータを使用

2 選挙時点の金沢市選挙人名簿登載者374,677人から無作為に抽出(全84の投票区から無作為に抽出した11の投票区から無作為に抽出する2段階抽出)した1,500人の対象者に、2021年11月に実施した同様の無作為抽出の調査からの継続対象者605人を加えた計2,105人の対象者に対して7月27日に調査票を郵送し、同封した返送用封筒で返送を求める方法で回収した。9月末日到達分までを集計の対象とし、白紙を除く有効回収数は755、白紙を除く有効回収率は35.9%であった。

3 所属党派や得票数のデータの出典は、石川県選挙管理委員会Webページ (<https://www.pref.ishikawa.lg.jp/senkan/r4sangi/sokuhou/kaihyousokuhou.html>) [2022年9月14日閲覧]。政党の推薦・支援については、『北國新聞』2022年6月23日朝刊を参照した(公明党は岡田候補を推薦、社民党は小山田候補を推薦、国民民主党は小山田候補を支援)。

して、現職候補が選挙に強い理由を、有権者の意識や投票行動の側面から分析する。

## 2. 先行研究の検討

有権者の意識や投票行動の側面から見て、現職候補はなぜ選挙に強いのだろうか。

そもそも候補者について有権者が知らないと投票の選択肢に入っていないであろうが、現職候補は在任中にメディアの報道や集会などで有権者が目にしたり接触する機会も多いであろうから、新人候補に対して現職候補が強い理由として、まずは、有権者の認知度（候補者の知名度）の違いが考えられる。

ストークスとミラー（Stokes and Miller, 1966, 204-205）は、アメリカの下院選についての全国規模の意識調査のデータをもとに、現職候補は新人候補よりもはるかに知られており、さらに、「知られることは好感を持たれることだ」として、認知度は、その候補者に好感を持ち、投票することにつながっていると指摘している。

平野（2007, 108）は、日本の衆院選についての全国規模の意識調査のデー

---

各候補者の年齢や主な経歴などの概要は下記の通りである（選挙公報及び『北國新聞』2022年6月23日朝刊を参照した）。

岡田直樹（現職）：60歳。4期目を目指して出馬。石川県出身。地元紙の『北國新聞』の記者・論説委員を務めて2000年に退職した後、2002年に県議補選に立候補して当選して2003年までの任期を務めた後、2004年参院選で立候補して初当選。1期目に国土交通事務官、2期目に財務副大臣、3期目に官房副長官を務めた。

小山田経子（新人）：44歳、山口県出身、バスガイド、行政書士、タレント。2022年4月の参院石川県選挙区補選にも立候補して落選している。

西村祐士（新人）：67歳、石川県出身、共産党石川県委員会書記長。1996年以降、衆院石川2区から6回立候補して落選。2022年4月の参院石川県選挙区補選にも立候補して落選している。

先沖仁志（新人）：46歳、広島県出身、コンビニ経営会社役員、参政党石川支部副支部長。

山田信一（新人）：51歳、埼玉県出身、個人投資家。

針原崇志（新人）：50歳、富山県出身、派遣社員、維新政党・新風政策委員。

タをもとに、現職候補や元職候補は新人候補に比べて有権者の認知度が高く、さらにその認知度の高さは候補者への感情に対してプラスの効果を及ぼしており、「単純接触仮説が予想するように、単にある候補者に関する情報に触れることが、その候補者に対する感情にプラスに作用することを示唆するものと考えることができる（平野, 2007, 113）」と指摘している。

三宅（1995, 40）も、衆院選についての全国規模の意識調査のデータをもとに、「よく知られている候補者ほど、よりよく評価される」として、認知度は好感度と密接な関係があることを指摘している。

確かに、よく知られていることは好感を持たれることにつながりやすいであろうが、たとえ知られていても、その実績などについて評価されていない場合は、必ずしも高い好感度につながらないことも考えられる。

今井（2003）は、自民党の政務調査会の利益誘導に関係する部会への所属についてのデータと有権者意識調査のデータを用いて、自民党の現職候補の在任中の活動は、その候補者についての認知度が高い有権者に限ってイメージや好感度の高さに影響を及ぼすと指摘しているが、認知されていることは、それ自体が好感をもたらしやすいことに加え（単純接触仮説）、現職としての過去の経歴や実績がイメージや好感度に結びつくか否かを左右する要因（調整変数）としても作用していると考えられる。

有権者に認知されている場合、現職としての過去の経歴や実績は、一つには、能力や信頼性などの候補者の個人的特性についての評価に基づく投票につながっていると考えられる。

たとえば、バーンハルトとイングバーマン（Bernhardt and Ingberman, 1985）は、有権者は候補者の能力や意図について確信を持たず、どの候補者が当選するかによって起こる結果についてリスクを避けようとするが、現職候補が勝利しやすいのは、現職候補は過去の実績を判断材料に出来るためリスクが少ないと評価されるからであると指摘している。

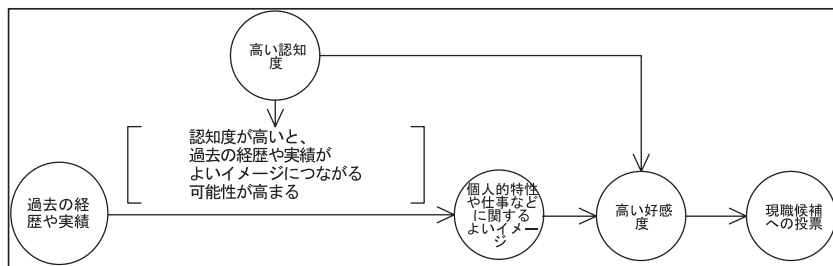
個人的特性については、メイヒュー（Mayhew, 2004, 49）が、アメリカの

政治家は再選されるために、経験や誠実さなどの自らの個人的特性を宣伝する「宣伝活動」を行うと指摘しているが、そのほかにも、政策争点について有権者が好ましいと思うような立場を表明する「立場表明」や、有権者の個人的な問題での世話や選挙区への利益誘導など具体的な恩恵の提供についての功績を主張する「功績誇示」を行うと指摘している。

有権者に認知されている場合、有権者に個人的便宜をはかったり選挙区や職業的利益に貢献するなどの現職としての過去の功績（実績）は、これまでの仕事についての評価や今後の仕事についての期待に基づく投票につながっていると考えられる。

三宅（1995, 138）は、これらの個人的特性や仕事などに関するよいイメージを候補者に抱くことが、その候補者に好感を持つことにつながり、ひいてはその候補者に投票することにつながると指摘している。そして、現職候補が有利なのは、認知度、イメージ、好感度などの点において、新人候補に比べてはるかに有利であるからだと指摘している（三宅, 2001, 39-40）。

以上の先行研究をまとめると、現職候補であることは有権者の認知度が高い可能性が高く、認知されていれば、それ自体が好感をもたらしやすいことに加え（単純接触仮説）、現職としての過去の経歴や実績が、候補者の個人的特性や仕事などに関するよいイメージにつながる可能性が高く（逆に悪いイメージにつながる可能性もないわけではないが）、それが現職候補に好感



【図1】 現職候補が選挙に強い理由

[表2] 候補者についての有権者の認知度（上段：人数／下段：％）

	岡田候補 (自民)	小山田候補 (立民)	西村候補 (共産)	先沖候補 (参政)	山田候補 (N党)	針原候補 (新風)
よく知っている	153 20.3%	6 0.8%	8 1.1%	2 0.3%	1 0.1%	5 0.7%
ある程度知っている	313 41.5%	97 12.8%	57 7.5%	20 2.6%	11 1.5%	0 0.0%
名前だけ知っている	243 32.2%	338 44.8%	210 27.8%	59 7.8%	79 10.5%	48 6.4%
わからない	37 4.9%	282 37.4%	446 59.1%	637 84.4%	630 83.4%	669 88.6%
無回答	9 1.2%	32 4.2%	34 4.5%	37 4.9%	34 4.5%	33 4.4%
合計	755 100.0%	755 100.0%	755 100.0%	755 100.0%	755 100.0%	755 100.0%

を持つことにつながり、ひいては現職候補に投票することにつながるために現職候補は選挙に強い、と考えることができる（[図1] 参照）。

### 3. 分析

本節では、[図1] で示した現職候補の選挙における強さをもたらす要因や要因間の関係が実際に存在するのかを、筆者が金沢市で実施した有権者意識調査のデータで確認していきたい。まずは、認知度、イメージ、好感度の点で現職候補は本当に新人候補を凌駕しているのかを確認し、次に、それらの要因間に[図1]のような関係性が存在するのかを確認する。

#### 3-1. 認知度

まずは、候補者についての有権者の認知度を[表2]で検討する<sup>4</sup>。自民党

4 質問文及び選択肢は次のとおりである。

[問] 7月10日に行われた今回の参院選の石川県選挙区の候補者を、どの程度ご存知ですか。当てはまる番号を1つ選んで下さい。

1. よく知っている、2. ある程度知っている、3. 名前だけ知っている、4. わからない

現職の岡田候補は、「ある程度知っている」が41.5%で最も多く、「よく知っている」の20.3%も合わせると、6割以上の人が、「よく」あるいは「ある程度」知っていると回答している。「わからない」はわずか4.9%である。それに対して他の新人候補は「わからない」が多く、次点であった立憲民主党新人の小山田候補でも37.4%、これまで何度も石川県内の選挙に立候補してきた共産党新人の西村候補でも59.1%が「わからない」と回答し、他の小政党の候補者にいたっては8割以上の人が「わからない」と回答している。やはり現職候補の認知度は圧倒的であることが確認できる。

### 3-2. 候補者イメージ（選択式設問）

次に、候補者についての有権者のイメージ（印象）を検討する。候補者についてのイメージを選択式で尋ねた設問（複数回答可）の回答を表にしたものが〔表3〕である<sup>5</sup>。

ここで挙げられた個人的特性や仕事などに関する5つのよいイメージの項目について、「いずれの印象もない」と回答した人は、現職の岡田候補は32.5%であったのに対して、次点の小山田候補は68.1%、他の候補者は8割以上がいずれのよい印象もないと回答している。

個別の項目についてみると、特に実行力について差が大きく、現職の岡田候補については30.2%の回答者が「実行力がある」と回答したのに対して、次点の小山田候補でもわずか2.5%であり、27.7ポイントもの差が付いている。次に次点との差が大きいのは、「人柄がよい」（21.2ポイント）と「選挙区のためにつくしてくれる」（20.1ポイント）である。「政策や主張がよ

5 質問文及び選択肢は次のとおりである。

〔問〕 今回の参院選の石川県選挙区の候補者について、どのような印象を持ちましたか。それぞれの候補者について、当てはまる番号をすべて選んで下さい。

1. 政策や主張がよい、
2. 実行力がある、
3. 人柄がよい、
4. 選挙区のためにつくしてくれる、
5. 自分（の家族）と同じ職業の人々の問題にとりくんでくれる、
6. 以上のいずれの印象もない



[表3] 候補者についてのイメージ（複数回答可の選択式設問）（上段：人数／下段：％）<sup>6</sup>

	岡田候補 (自民)	小山田候補 (立民)	西村候補 (共産)	先沖候補 (参政)	山田候補 (N党)	針原候補 (新風)
政策や主張がよい	164 21.7%	77 10.2%	31 4.1%	26 3.4%	8 1.1%	2 0.3%
実行力がある	228 30.2%	19 2.5%	8 1.1%	7 0.9%	4 0.5%	0 0.0%
人柄がよい	249 33.0%	89 11.8%	45 6.0%	12 1.6%	12 1.6%	5 0.7%
選挙区のためにつくしてくれる	194 25.7%	42 5.6%	26 3.4%	12 1.6%	4 0.5%	5 0.7%
自分の職業の問題にとりこんでくれる	15 2.0%	31 4.1%	7 0.9%	3 0.4%	1 0.1%	1 0.1%
以上のいずれの印象もない	245 32.5%	514 68.1%	604 80.0%	648 85.8%	666 88.2%	670 88.7%

い」は、現職の岡田候補と次点の小山田候補との差は11.5%ポイントと比較的小さく、「職業の問題にとりこんでくれる」については、むしろ次点の小山田候補の方が現職の岡田候補を2.1%ポイント上回っている。

まとめると、全体的にやはり現職候補の（よい）イメージの量は圧倒的であることが確認できる。特に、新人候補に比べて現職候補は在任中のメディア報道や集会等における接触などを通じて、仕事や能力や人柄に関する、より踏み込んだ情報を有権者が得やすいゆえか、「選挙区に尽力」「実行力」「人柄」に関するイメージの点で新人候補に大きく差をつけている。

それに対して、選挙公報や選挙期間中のメディア報道等でも比較的情報が得やすい「政策・主張」に関するイメージや、候補者を推薦している労働組合など所属する職業関係の団体を通じて情報を得ることもある「職業」に関するイメージでは、現職候補と新人候補の差は小さい、あるいは、場合によっては逆転していることが確認できる。

6 パーセントの数値は、全回答者中の何%がその項目に○をしたかを示す。複数回答可であるため、合計は100%とはならない。

[表4] 候補者のイメージについての自由記述式設問の回答者数と回答率<sup>8</sup>

	岡田候補 (自民)	小山田候補 (立民)	西村候補 (共産)	先沖候補 (参政)	山田候補 (N党)	針原候補 (新風)
回答者数	434	245	137	68	63	39
回答率	57.5%	32.5%	18.1%	9.0%	8.3%	5.2%

### 3-3. 候補者イメージ（自由記述式設問）

意識調査では、前項で検討した選択式の設問とは別に、候補者のイメージを自由記述式でも尋ねた<sup>7</sup>。選択式の設問では5項目のいずれもよいイメージについて該当するかについての回答であったが、自由記述式設問への回答では悪いものも含めたイメージが記述される。そこで、よいイメージのみならず悪いイメージも含めた候補者のイメージ量を比較するため、全回答者755人中、何人がイメージについて何らかの記述をしたかという回答者数・率を集計したものが [表4] である。

[表4] をみると、現職の岡田候補のイメージについては6割程度の回答者が何らかのコメントを記述しており、次点の小山田候補の3割程度、西村候補の2割程度を大きく上回っている。このことから、選択式の設問と同様、やはり現職の岡田候補がイメージ量の点で新人候補を圧倒していることが確認できる。

では、実際、どのようなイメージで有権者は候補者を捉えているのであろうか。現職の岡田候補と、比較的回答率が高かった新人の小山田候補と西村候補についての回答に見られる頻出語（名詞と形容詞）を表にしたものが [表5] である（岡田候補は頻度15以上、小山田候補は頻度10以上、西村候補

7 調査票においては、選択式設問の項目に影響されないよう、自由記述式設問は選択式設問の前に配置した。質問文は次のとおりである。

[問] 今回の参院選の石川県選挙区の候補者について、どのような印象を持ちましたか。ご自由にお書きください。

8 「特になし」等、候補者のイメージについて記述していない回答は、回答なしとして扱った。

は頻度5以上)<sup>9</sup>。さらに、どのような文脈でそれらの単語が使用されているかをみるため、自由記述中に2語連続して登場する単語(2-gram)で頻出するもの(岡田候補は頻度5以上、小山田候補と西村候補は頻度3以上)をネットワークグラフで示したものが[図2]と[図3]と[図4]である。

自民党現職の岡田候補については、「自民党」という所属政党に関する単語が上位に来ているほか、「実績」や「経験」といった仕事や能力に関する単語や、「誠実」といった人柄に関する単語が上位に来ていることが確認できる。

立憲民主党新人の小山田候補については、今回、石川県選挙区の唯一の女性候補ということで「女性」という単語が上位に来ているほか、「石川 - 県 - 外 - 出身」や「落下傘」など石川県出身でないことを指摘する単語や、「立憲」という所属政党に関する単語が上位に来ていることが確認できる。

共産党新人の西村候補については、「共産党」という所属政党に関する単語が圧倒的である。

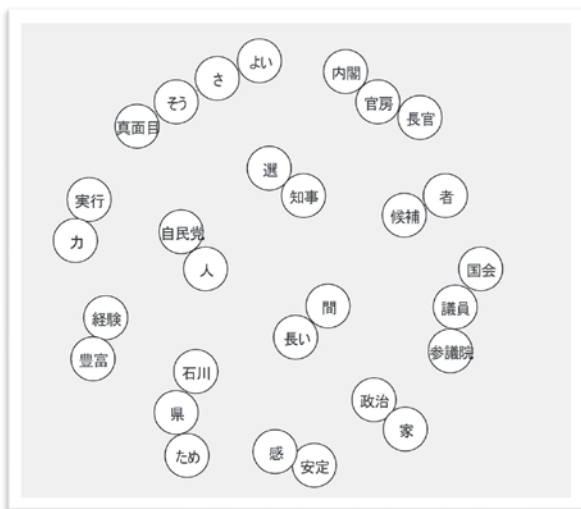
まとめると、選択式設問の結果と同様に、現職候補のイメージ量は圧倒的であることがまずは指摘できる。イメージの内容については、所属政党(自民党/立憲民主党/共産党)や、経歴(県外出身)や、属性(女性)など、選挙公報やメディアの選挙報道等を通じて比較的情報が得やすい外形的な特性に関するイメージが、特に新人の小山田候補と西村候補について多いこと、現職の岡田候補については、在任中のメディア報道や集会等における接触を通じて、外形的でない、より踏み込んだ候補者についての情報を有権者が得やすいゆえか、「実績」や「経験」といった仕事や能力に関するイメージや、「誠実」といった人柄に関するイメージが多いことが指摘できる。

---

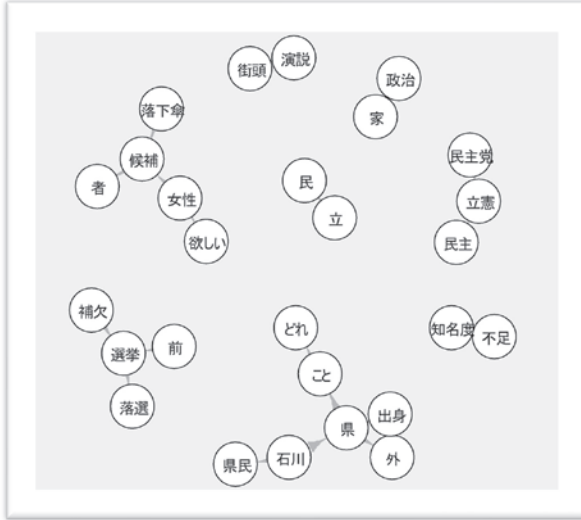
9 本稿におけるテキスト分析にはRMcCabパッケージを使用した(辞書はデフォルトのものから変更していない)。なお、「良い」=「よい」など、一部の回答については表記を統一した。

[表5] 候補者のイメージについての自由記述における頻出語（名詞と形容詞）

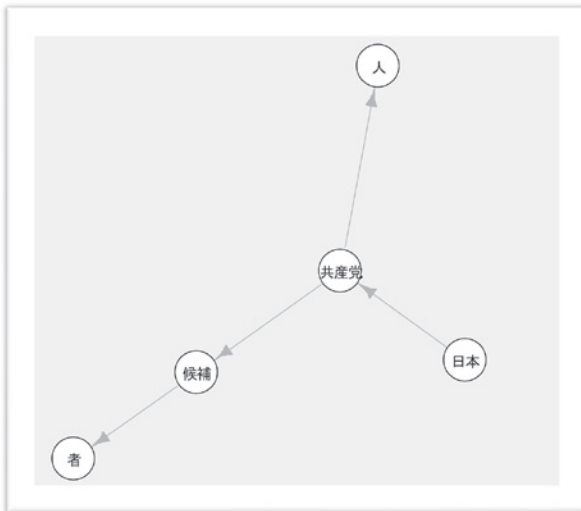
	岡田候補 (自民)	小山田候補 (立民)	西村候補 (共産)		
人	62	女性	38	共産党	48
自民党	57	石川	33	人	19
石川	46	人	27	候補	11
そう	40	選挙	27	の	10
印象	33	の	22	者	10
議員	30	県	20	ない	9
こと	28	ない	18	そう	8
県	27	候補	18	支持	7
方	27	立憲	18	党	7
政治	24	こと	14	よい	6
よい	23	方	14	選挙	6
ため	21	印象	13	日本	6
当選	20	県	13	印象	5
ない	19	者	12	何	5
の	19	立候補	12	共産	5
誠実	19	出身	11	方	5
経験	18	落下傘	11	名前	5
候補	17	政治	10		
実績	17	欲しい	10		
長い	17				
安定	16				
期待	15				
選挙	15				
力	15				



[図2] 岡田候補（自民）のイメージについての自由記述において連続する単語（名詞と形容詞）



[図3] 小山田候補 (立民) のイメージについての自由記述において連続する単語 (名詞と形容詞)



[図4] 西村候補 (共産) のイメージについての自由記述において連続する単語 (名詞と形容詞)

[表6] 候補者の好感度<sup>11</sup>

	全体		無党派層	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
岡田候補（自民）	60.3	20.9	53.5	16.3
小山田候補（立民）	44.4	21.0	47.1	17.5
西村候補（共産）	39.6	20.3	42.9	16.3
先沖候補（参政）	35.2	21.1	38.3	19.8
山田候補（N党）	38.3	21.2	41.6	18.1
針原候補（新風）	35.3	20.7	39.2	18.4

### 3-4. 好感度（感情温度）

[表6] は、候補者についての好感度を、好きでも嫌いでもない場合は50度として0度から100度までの数値で回答してもらったもの（「感情温度」といわれる）の平均値と標準偏差を表にしたものである<sup>10</sup>。

まず、左の列の回答者全体について集計したのを見ると、現職の岡田候補の好感度の平均値は、6人の候補者のなかで唯一、「好きでも嫌いでもない」場合の50度を上回る60.3度であり、岡田候補の好感度は他候補を圧倒している。

しかし、回答者全体に自民党支持者が多いためにその候補者である岡田候補の好感度も高くなっている可能性があるため、支持政党を尋ねる設問で「支持なし」を選択した無党派層のみを抽出して集計したものが右の列であ

10 質問文は次のとおりである。

[問] あなたは、次に挙げる候補者や政党に対し、好意的な気持ちを持っていますか、それとも反感を持っていますか。好意も反感も持たないときは50度としてください。好意的な気持ちがあれば、その強さに応じて51度から100度、また、反感を感じていれば、49度から0度のどこかの数字で答えてください。

11 回答者全体の好感度の平均値の95%の信頼区間は、岡田候補は58.8-61.8度、小山田候補は42.8-46.0度、西村候補は38.1-41.2度、先沖候補は36.7-39.9度、山田候補は33.6-36.8度、針原候補は33.7-36.9度であった。無党派層の好感度の平均値の95%の信頼区間は、岡田候補は51.4-55.6度、小山田候補は44.8-49.4度、西村候補は40.7-45.1度、先沖候補は39.2-44.1度、山田候補は35.6-41.0度、針原候補は36.7-41.7度であった。

る。全体の集計に比べて他候補との平均値の差は小さくなるものの、やはり現職の岡田候補の好感度は他候補を凌駕していることが確認できる。

### 3-5. 候補者についての意識間の関係

前項までの分析から、現職である岡田候補は、認知度、イメージ、好感度のいずれの点でも新人候補に大きな差をつけていることが確認できたが、次に、これらの候補者についての意識がどのように影響しあっているのかについて、複数段階の重回帰分析を行う「パス解析」で分析する。

なお、通常、有権者は自分が支持する政党の公認候補をよく認知していて、よいイメージを持ち、好感も持っていると考えられるが、政党についての意識が候補者についての意識に大きな影響を及ぼしていることは、これまで多くの先行研究で指摘されてきた (Bartels, 2002, 59) (Holian and Prysby, 2015, 136)。そのため、政党支持の影響を除いても、[図1]のような候補者についての意識間の関係性が成り立つのかを確認するため、パス解析には公認政党の支持者であるか否かも変数として投入した。

現職の岡田候補と新人の小山田候補と西村候補について、有権者の意識間の関係についてのパス解析を行った結果を示したものが [図5] と [図6] と [図7] である<sup>12</sup>。

---

12 分析にはIBM SPSS Amos 28を使い、データは欠損値を含むケースを除外して、[図5] は667ケース、[図6] は614ケース、[図7] は592ケースを用いた。各変数の定義は下記のとおりである。

「認知度」は、認知度が高まるほど数値が上がるように、1. わからない、2. 名前だけ知っている、3. ある程度知っている、4. よく知っている、の4段階とした。いずれにも○をしていない回答は欠損値とした。

「イメージ量」は、候補者のイメージについての選択式設問で5つのよいイメージの項目について該当すると○をした数を集計した。最小値は0、最大値は5である。「以上のいずれの印象もない」という項目に○をしているものは0、どの項目にも○をしていないものは欠損値とした。

「好感度」は、0から100までの感情温度の回答の数値をそのまま用いた。数値の記入

パス（矢印）の上の数値は「標準化係数」で、数値が大きいほど影響力が強いことを示す。それぞれのパスが統計学的に有意な影響力を及ぼしていない確率（危険率ともいわれる。低いほどよい）を示す「有意確率」は、図には示していないが、単純接触仮説に関わる認知度から好感度へのパスの有意確率が、小山田候補の〔図6〕では0.212で10%を超えており、西村候補の〔図7〕では0.008で0.1%を超えている以外は、いずれのパスの有意確率（両側検定）も0.001（0.1%）未満である。変数の右上に表示されている数値は「決定係数（R-square）」であり、その変数に矢印が向かっている変数を総合すると、その変数の分散のどの程度が説明できるかを示す。

〔図5〕と〔図6〕と〔図7〕から、どの候補者についても、公認政党の支持者であれば、認知度、イメージ、好感度が高いことがまずは確認できる（「政党→認知度」「政党→イメージ」「政党→好感度」のパス）。さらには、政党支持の影響を除いたとしても、認知しているるとよいイメージを持つ傾向があり（「認知度→イメージ」のパス）、よいイメージを持っていると好感を持つ傾向がある（「イメージ→好感度」のパス）、という一連の関係性が存在することも確認できる。

認知していることと好感度の直接的な関係（単純接触仮説）については、岡田候補については、係数値は低いながらも0.1%水準で統計学的に有意なプラスの関係があることが確認できるが（「認知度→好感度」のパス）、小山田候補については、先述のように10%水準でも統計学的に有意な関係はなく、西村候補については、1%水準で有意ではあるものの係数はマイナスであり、イメージや政党支持の影響を除くと、認知していることはむしろ好感度の低さにつながっているという結果となっている。

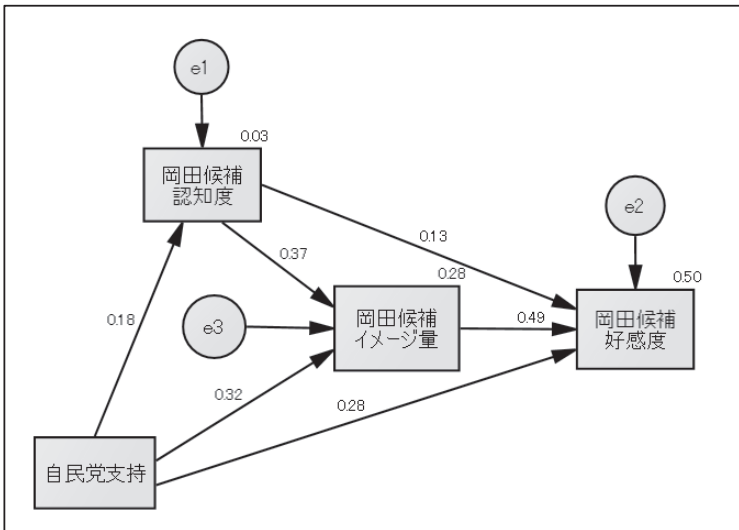
---

がないものや、マイナスや100度を超えるイレギュラーな回答は欠損値とした。

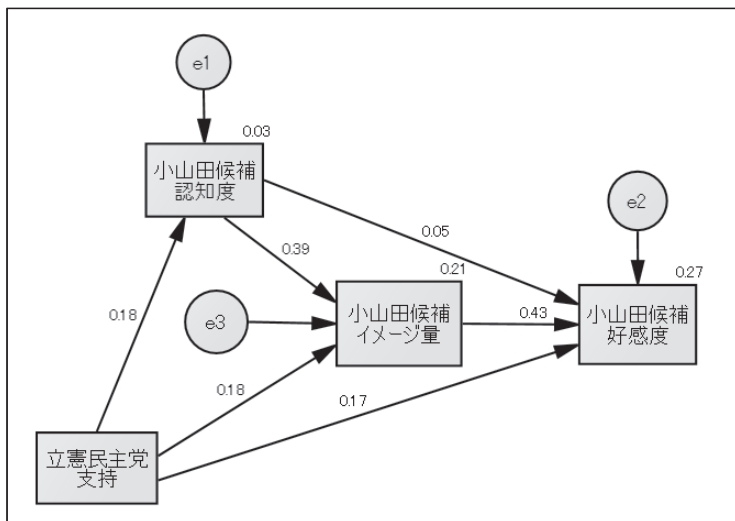
「政党支持」は、政党支持を尋ねる設問（注14を参照）で、それぞれの候補者を公認した政党の支持者と回答した場合は1、それ以外の政党を支持、あるいは支持政党なしと回答した場合は0、無回答は欠損値とした。



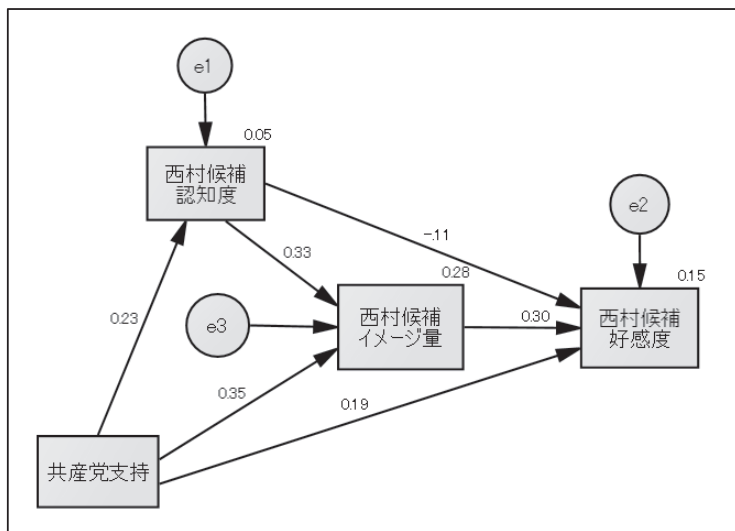
図には示していないが、好感度に対する各要因の総合効果（好感度へのパスの係数が示す直接効果と他の要因を経由した間接効果を合わせたもの）を見ると、岡田候補は、政党支持0.490、認知度0.310、イメージ0.490、小山田候補は、政党支持0.283、認知度0.213、イメージ0.428、西村候補は、政党支持0.287、認知度-0.013、イメージ0.295、となっている。このうち、政党支持の総合効果に注目すると、現職の岡田候補については、自民党支持者は岡田候補に好感を持つ傾向が強いのにに対して（政党支持の総合効果は0.490）、他の2人の新人候補については、公認政党を支持していることと候補者に好感を持つこととの関係性が弱い（政党支持の総合効果は0.283と0.287）、ということが分かる。



[図5] 岡田候補（自民）についての意識に関するパス解析



[図6] 小山田候補（立民）についての意識に関するパス解析



[図7] 西村候補（共産）についての意識に関するパス解析

### 3-6. 候補者についての意識と投票行動の関係

前項では候補者や政党についての意識はどのように影響しあって候補者に対する好感度に集約されているかを検討したが、最後に、好感度は最終的にどのように各候補者への投票につながっているのかを検討する。

前項の分析では、政党についての意識である政党支持が候補者についての意識（認知度、イメージ、好感度）に大きな影響を及ぼしていることが明らかになったが、政党についての意識は投票行動にも大きな影響を及ぼしていることが先行研究で指摘されてきた（小林, 2000, 61-64）。[表7] は、投票した候補者を尋ねる設問<sup>13</sup>への回答と政党支持についての設問<sup>14</sup>への回答の関係を表にしたものであるが、確かに、公認政党（自民党・立憲民主党・共産党）の支持者は、その7割以上が公認された候補者に投票していることが確認できる。

そのため、先のパス解析と同様に公認政党の支持者であるか否かも独立変数に加えたうえで、候補者の好感度を独立変数とし、投票行動を尋ねる設問でその候補者に投票したと回答した場合を1、それ以外の候補者に投票したと回答した場合を0としたものを従属変数（「無回答」「棄権」「白票」は欠損値として分析から除外）とするロジスティック回帰分析を行った結果が[表8]である。

まず、有意確率については、いずれの候補者も2つの独立変数は1%水準

---

13 質問文及び選択肢は次のとおりである。

[問] 今回の参院選の石川県選挙区では、どなたに投票しましたか。1つ選んで下さい。

1. 岡田直樹、2. 小山田経子、3. 西村祐士、4. 山田信一、5. 先沖仁志、6. 針原崇志、7. 白票

14 質問文及び選択肢は次のとおりである。

[問] あなたは、ふだん何党を支持していらっしゃいますか。1つ選んで下さい。

1. 自民党、2. 公明党、3. 国民民主党、4. 立憲民主党、5. 社民党、6. 共産党、7. 日本維新の会、8. れいわ新選組、9. NHK党、10. 参政党、11. 維新政党・新風、12. その他の政党・政治団体、13. 支持している政党はない

[表7] 投票行動と政党支持の関係 (上段：人数/下段：%)<sup>15</sup>

	自民党	公明党	国民民主党	立憲民主党	社民党	共産党	日本維新の会	れいわ新選組	NHK党	参政党	維新政党・新風	支持政党なし	無回答	合計
岡田候補 (自民)	217 72.8%	12 85.7%	6 42.9%	3 6.0%	2 22.2%	0 0.0%	23 46.0%	1 12.5%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	80 33.3%	16 44.4%	360 47.7%
小山田候補 (立民)	6 2.0%	1 7.1%	3 21.4%	36 72.0%	4 44.4%	3 14.3%	13 26.0%	2 25.0%	0 0.0%	0 0.0%	1 50.0%	48 20.0%	1 2.8%	118 15.6%
西村候補 (共産)	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	4 8.0%	2 22.2%	16 76.2%	1 2.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	8 3.3%	3 8.3%	34 4.5%
先沖候補 (参政)	3 1.0%	0 0.0%	2 14.3%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	1 0.4%	0 0.0%	6 0.8%
山田候補 (N党)	4 1.3%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	3 6.0%	3 37.5%	1 20.0%	7 87.5%	0 0.0%	9 3.8%	1 2.8%	28 3.7%
針原候補 (新風)	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	1 50.0%	0 0.0%	0 0.0%	1 0.1%
白票	4 1.3%	1 7.1%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	2 4.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	5 2.1%	0 0.0%	12 1.6%
棄権・無回答	64 21.5%	0 0.0%	3 21.4%	7 14.0%	1 11.1%	2 9.5%	8 16.0%	2 25.0%	4 80.0%	1 12.5%	0 0.0%	89 37.1%	15 41.7%	196 26.0%
合計	298 100.0%	14 100.0%	14 100.0%	50 100.0%	9 100.0%	21 100.0%	50 100.0%	8 100.0%	5 100.0%	8 100.0%	2 100.0%	240 100.0%	36 100.0%	755 100.0%

で有意な影響力を及ぼしていた。

オッズ比を見ると、好感度については、岡田候補1.077、小山田候補1.097、西村候補1.068で、同様の値となっている。これは、岡田候補を例にとると、政党支持を一定としてその影響を除くと、岡田候補の好感度(0～100度)が1度上昇すれば、他候補ではなく岡田候補に投票する確率が1.077倍になるという意味であり、どの候補者についても、政党支持の影響を排除しても候補者の好感度が投票行動に影響していることが確認できる。

政党支持のオッズ比は候補者によって大きく差があり、岡田候補8.420、小山田候補12.343、西村候補58.345となっている。これは、岡田候補を例にとると、候補者の好感度を一定としてその影響を除くと、自民党を支持していると回答する人はそうでない人に比べて、他候補ではなく岡田候補に投票する確率が8.420倍になるという意味であり、政党支持のオッズ比が大きい小山田候補と西村候補については、政党支持が候補者の好感度を經由せず投票行動に直接的な影響を強く及ぼしているといえる。

先の好感度に対する政党支持の総合効果等のパス解析の結果や[表7]も

15 カイ2乗検定の結果は0.1%水準で有意、クラマーのV係数は0.468であった。

[表8] 各候補者に投票したか否かを従属変数とするロジスティック回帰分析

		回帰係数	標準誤差	オッズ比	有意確率
岡田候補 (自民)	好感度	0.075	0.010	1.077	**
	自民党支持	2.131	0.333	8.420	**
	(定数)	-4.344	0.553		**
	N	508			
	決定係数(Nagelkerke)	0.562			
		回帰係数	標準誤差	オッズ比	有意確率
小山田候補 (立民)	好感度	0.093	0.012	1.097	**
	立憲民主党支持	2.513	0.527	12.343	**
	(定数)	-6.280	0.672		**
	N	475			
	決定係数(Nagelkerke)	0.479			
		回帰係数	標準誤差	オッズ比	有意確率
西村候補 (共産)	好感度	0.066	0.021	1.068	*
	共産党支持	4.066	0.823	58.345	**
	(定数)	-6.461	1.115		**
	N	461			
	決定係数(Nagelkerke)	0.492			

\*\*p<0.001 \*p<0.01

合わせて考えると、いずれの候補者についても、公認政党の支持者は結果として7割程度がその候補者に投票している点では違いはないが、現職の岡田候補については、政党についての意識と候補者についての意識は連動しており、自民党支持の人は岡田候補に好感を持ったうえで投票する傾向があるのに対して、他の2人の新人候補は、公認政党を支持していることと候補者に好感を持つこととの関係性が薄く、候補者についての意識とは別に、ともかく支持政党の候補者であるから投票するという傾向が強いといえる。

#### 4. おわりに

本稿は、2022年参院選後に筆者が金沢市で実施した有権者意識調査のデータを使用して、現職候補が選挙に強い理由を、有権者の意識や投票行動の側面から分析してきたが、得られた知見を最後にまとめる。

まず、候補者についての有権者の認知度については、現職候補の認知度が圧倒的であることが確認できた。

候補者のイメージについても、現職候補のイメージ量が圧倒的であること

が確認できた。イメージの中身については、現職候補は、在任中のメディア報道や集会等における接触などを通じて、より踏み込んだ情報を有権者が得やすいゆえか、仕事や能力や人柄に関するイメージで新人候補に大きく差をつけていた。それに対して新人候補は、選挙公報や選挙期間中のメディア報道等を通じて比較的情報が得やすい、所属政党や経歴や属性や政策・主張などの外形的な特性に関するイメージが強かった。筆者は別稿において、今回とは別の参院選や、参院選以外の種類の選挙について有権者の候補者イメージを分析したが（岡田, 2019, 26）（岡田, 2020, 42）、今回もそれと同様の結果となった。

好感度についても、現職候補の好感度が圧倒的であり、無党派層のみを抽出しても好感度の点で新人候補を凌駕していることが確認できた。

以上の有権者の候補者についての意識の間の関係性について、政党支持も考慮して分析したところ、候補者の公認政党の支持者は、認知度、イメージ、好感度の点でその候補者を高く評価する傾向があること、また、政党支持の影響を除いたとしても、認知していればよいイメージを持ち、よいイメージを持っていれば好感を持つ傾向がある、という先行研究で指摘されてきた一連の関係性があることが確認できた。ただし、認知していることが直接的に好感につながる（単純接触仮説）については、統計学的に有意でなかったり、むしろマイナスに作用している場合もあり、先行研究と一部異なる結果となった。

また、候補者についての意識が集約された好感度は、政党支持の影響を排除しても、投票行動に影響していることも確認できた。

ただし、現職候補と新人候補では、候補者についての意識と政党支持と投票行動の関係性に違いもあり、現職候補については、候補者についての意識と政党支持は強く連動しており、有権者は支持政党が公認している候補者を高く評価したうえで投票する傾向が強いものに対して、新人候補については、有権者は支持政党が公認している候補者を必ずしも高く評価しておらず、と

もかく支持政党の候補者であるから投票するという傾向が強いということが分かった。

以上が本稿の分析から得られた知見であるが、これらを踏まえて、現職候補が選挙に強い理由を有権者の意識や投票行動の側面から考察するならば、現職候補も新人候補も、認知されていればよいイメージを持たれ、よいイメージを持たれば好感を持たれ、好感を持たれば投票につながる傾向があること、また、公認政党の支持者の多くの票を（候補者として積極的に評価されているかどうかはさておいて）確保していることでは違いはないものの、現職候補は、認知度、イメージ、好感度のいずれの点でも新人候補に圧倒的な差をつけていることから、無党派層など、公認政党の支持者以外の有権者の票を幅広く獲得しているからであると結論できる。

今後の課題としては、第一に、なぜ有権者の候補者について意識にこのような違いが出るのかについて、候補者の活動や有権者との接点などから明らかにすることが挙げられる。

第二に、本稿の知見が個別の地域や選挙や候補者を超えて一般的に当てはまるのかについて、今後さらに調査・分析を重ねて検証していく必要がある。特に、本稿で分析した有権者の候補者についての意識は、当然ながら、対象となる候補者に依存する部分が大きいと考えられる。たとえば、現職候補であっても過去の経歴や実績の点で不十分な候補者の場合は、認知度が高くとも、よいイメージや好感度や投票行動につながらないことも考えられる。

いずれにしても、本稿で取り組んだような、現職候補か新人候補かなどの候補者の属性と、候補者についての有権者の意識と、投票行動の関係性についての研究は未だ少なく、今後さらに調査・分析を進める必要がある。

## 追記

最後に、お忙しいなか調査にご回答を頂いた方々に厚く御礼申し上げたい。

なお、本稿は、科学研究費補助金・基盤研究(C)（課題番号20K01472、研

究課題名「異なった種類の選挙における有権者の候補者志向の研究」の成果の一部である。

[参考文献 (alphabet順)]

- Ariga, Kenichi, Yusaku Horiuchi, Roland Mansilla, and Michio Umeda. 2016. "No sorting, no advantage: Regression discontinuity estimates of incumbency advantage in Japan." *Electoral Studies*, 43, 21-31.
- Bartels, Larry M. 2002. "The Impact of Candidate Traits in American Presidential Elections." In Anthony King (ed.), *Leaders' Personalities and the Outcomes of Democratic Elections*. Oxford University Press, 44-69.
- Bernhardt, Daniel M. and Daniel E. Ingberman. 1985. "Candidate Reputations and the 'Incumbency Effect'." *Journal of Public Economics*, 27, 47-67.
- Cain, Bruce, John Ferejohn, and Morris Fiorina. 1987. *The Personal Vote : Constituency Service and Electoral Independence*, Harvard University Press.
- Cox, Gary W. and Jonathan N. Katz. 1996. "Why Did the Incumbency Advantage in U.S. House Elections Grow?" *American Journal of Political Science*, 40, 2, 478-497.
- Desposato, Scott W. and John R. Petrocik. 2003. "The Variable Incumbency Advantage: New Voters, Redistricting, and the Personal Vote." *American Journal of Political Science*, 47, 1, 18-32.
- Gary, Jacobson C. and Jamie L. Carson. 2020. *The Politics of Congressional Elections, Tenth Edition*, The Rowman & Littlefield Publishing Group, Inc..
- 平野浩. 2007. 『変容する日本の社会と投票行動』木鐸社.
- Holian, David B. and Charles L. Prysby. 2015. *Candidate Character Traits in Presidential Elections*, Routledge.
- 今井亮佑. 2003 「有権者と政治エリート — 国会議員の活動と有権者の業績評価 —」『選挙研究』第18巻, 113-124頁.



- 川人貞史. 2004. 『選挙制度と政党システム』 木鐸社.
- 小林良彰. 2000. 『選挙・投票行動』 東京大学出版会.
- 増山幹高. 2013. 「小選挙区比例代表並立制と二大政党制」『レヴァイアサン』  
52号, 8-42頁.
- Matland, Richard E. and Nonley T. Studlar. 2004. “Determinants of Legislative Turn-  
over: A Cross-National Analysis.” *British Journal of Political Science*, 34, 87-  
108.
- Mayhew, David R. 2004. *Congress : The Electoral Connection (Second edition)*,  
Yale University Press.
- 三宅一郎. 1995. 『日本の政治と選挙』 東京大学出版会.
- 三宅一郎. 2001. 『選挙制度改革と投票行動』 木鐸社.
- Mondak, Jeffery J. 1995. “Competence, Integrity, and the Electoral Success of Con-  
gressional Incumbents.” *The Journal of Politics*, 57, 4, 1043-1069.
- 岡田浩. 2019. 「有権者の候補者イメージ再考」『選挙研究』 35巻1号, 19-34頁.
- 岡田浩. 2020. 「異なった種類の選挙における有権者の候補者志向と候補者と  
の接点」『金沢法学』 第63巻第1号, 23-45頁.
- 岡田浩. 2022. 「新人候補の強みと弱み」 白鳥浩（編著）『二〇二一年衆院選』  
法律文化社, 273-289頁.
- Stokes, Donald E. and Warren E. Miller. 1996. “Party Government and the Saliency  
of Congress.” In Angus Campbell, Philip E. Converse, Warren E. Miller, and  
Donald E. Stokes (eds.), *Elections and the Political Order*, John Wiley and  
Sons, Inc..
- 鈴木創. 2013. 「衆議院小選挙区選挙における現職効果」 新川敏光（編）『現代  
日本政治の争点』 法律文化社, 115-136頁.
- Tufte, Edward R. 1973. “The Relationship between Seats and Votes in Two-Party  
Systems.” *The American Political Science Review*, 67, 2, 540-554.